

琉球大学学術リポジトリ

ラン栽培のあらまし (1)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上里, 健次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21112

ラン栽培のあらまし (1)

近年、特に経済生活の安定化と都市生活の複雑化に伴って、切花や観賞植物の需要が多くなってきたが、中でも今まで上流社会にのみ作られていたランが、一般庶民の間にも浸透して来た事は非常に喜ばしい事である。昨年も約500株のランが主として台湾から輸入されているが、ゆくゆくは逆に沖縄自身の輸出産物として利用していたものである。沖縄の恵まれた自然条件とその花の持つ独特の観賞価値、及びその需要の面から、非常に有望だという事はすでに多くの関係者から認められている事であります。そこでその概略を説明して観賞植物に興味ある人々の知識の整理に役立てたいと思います。

1 ランの分類の仕方

ラン科植物は単子葉植物中最も大きなグループでその数は約500属15000種といわれているその上近年では育種技術が進歩して盛んに属間雑種が作りだされその種類はすでに50000種を越えるという盛況さをみせている。分類の仕方は勿論学術的分类の仕方が最も重要だが、それは後で述べる事にしてここでは普通よく使われている便宜的な分け方について述べてみたい。

a 生育状態による分け方

(i) 寄生種 Epiphytic orchid— 着生ラン、気生ランともいわれ樹木や岩石などに着生するもので普通の土に生える植物とは違って特別な構造を持つ気根で養分吸収を行っている。従ってこの種類のランはへゴ板に植付けるなり、あるいは素焼鉢に植える場合でも荒目のものを使い、水苔やへゴくずなどで空気の流通をよくしてやらなければならない。カトレヤ、ファレノプシス、デンドロビウム、バンダ等がこれに属する。

(ii) 地生種 Terrestrial orchid— 普通の植物のように土に生えるものでシプリベジウムやシンビジウム、カランセ等がこれに属する。尚前二者は地生種であっても、空気の流通は生育に欠かせぬ大切な条件でコンポスト(ランの植込み材料)には川砂、鉢片に水苔を混ぜて使うのがよい。カ

ランセは草花同様の扱いでよい。

(iii) 腐生種 Saprophytic orchid— 園芸上は主要ではないがこの種類に属するものもある。

b 茎の伸び方による分け方

(i) 単茎性ラン Monopodial orchid 茎が直立して株立ちとなり、分枝しないかわずかに分枝する。図Aのような種類でファレノプレス、バンダ、エリデス等がこれに属する。

(ii) 複茎性ラン Sympodial orchid 株立ちせずに分枝又は分株する。図Bのような種類でカトレヤ・デンドロビウム、シペリベジウム、シンビジウム等がこれに属する。

図 A

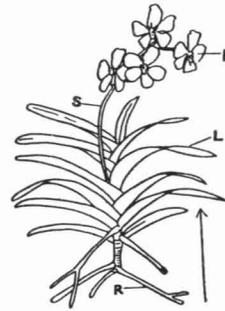
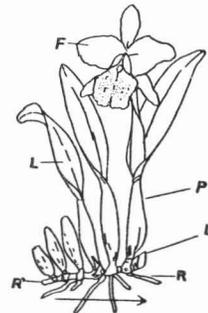


図 B



Aバンダ

Bカトレヤ

L: 葉 R: 根 F: 花 R: 葡萄茎

P: 偽球茎 S: 花茎 L: 新球茎

(加藤光治原図)

C 生育温度による分け方

(イ) 高温室性ラン—夏季昼間 24～27°C 夜間 21～24°C，冬季昼間20～25°C 夜間15～18°C，
ファレノプシス，バンダ，エリデス，デンドロビ
ウムの一部等。

(ロ) 中温室性ラン—冬季夜間13～15°C 昼間
18～21°C カトレヤ，エピテンドラム，レリアの
一部等。

(ハ) 低温室性ラン—冬季夜間 10°C 内外，昼
間18°C くらいで 中温室よりもやゝ低い温度を望
むもの，レリアの一部，オドントグロッサムの一
部，オンシジウムの一部等。

(ニ) 冷室性 ラン—冬季夜間 5～7°C 昼間
18°C くらいで 夏季はできるだけ冷涼な環境を好
むものの，マスデバリア，ミルトニア等。

尚，ランは同種類，あるいは同属のものでも自
生地が広域にわたっているのだから，従って最
適温度を一線で画する事は出来ない。その上属間
雑種が多くなってくると上記の分け方も絶対的
でなくなってくる。

D 東洋ランと洋ラン

東洋ランとはシンビジウム属中の一群の総称で
約一千年前の宋の時代から支那及び日本で培養さ
れてきたのでその呼名がついている。洋ランとい
う名称はその名前からして西洋のランのように思
いがちであるが，これらはすべて熱帯，亜熱帯性
の植物である。18世紀頃に当時東洋諸国と交遊の
多かったイギリス，フランスがランを自国に持ち
帰り，栽培法の改善や品種の改良を行って今日の
隆盛の基礎をつくり，その後その中心はアメリカ
に移ったが，わが国には明治から大正時代にか
けて入ってきたので西洋から入ってきたランとい
う事で洋ランと呼ばれている訳である。一般に東
洋ランと呼ばれているものは花の形や葉が清楚で
あり香り等も観賞の要素になるがそれに対して洋
ランは花が大きく色彩が強烈なのが特徴である。

(上里健次)